

——社会教育現場における ICT 導入の意義と新たな可能性——

京セラ株式会社 通信ビジネスソリューション研究開発部 事業開発推進部責任者 横田 希

第1章

自己紹介

現場の声と社会へのまなざし

こんにちは。私はこれまで京セラで事業企画や商品企画に携わってきました。特にここ数年は、シニア世代のICT活用支援に力を入れてきました。

スマートフォンやタブレットの開発だけでなく、全国各地のスマホ教室にも足を運び、たくさんの方々と直接お話ししてきました。「できるか不安だったけど、やってみたら楽しかった」といった生の声に触れることで、現場の困りごとや気づきがいかに大切かを痛感しています。

同時に、高齢化や地域のつながりの希薄化といった大きな社会課題にも向き合い、ICTが人と社会の可能性を広げる「道具」になれるか、日々考えています。

場はいかがでしようか。

地域の学びや支え合いを支える場所として、とても大切な存在だと思います。でも、実際にはNPOや市民活動の多くが、今もアナログな手法に頼らざるを得ず、事務作業や情報共有が大きな負担になっていることも多いのではないのでしょうか。

「もっと人と向き合う時間を増やしたい」「業務を効率化して、本来の活動に集中したい」——そんな声を現場でよく聞きます。こうした課題は、社会教育が本来持っている力を発揮するために、何とか乗り越えたい壁だと私は感じています。

第3章

ICTがもたらす価値

人に寄り添うデジタル化

では、ICTを導入すると何が変わるのでしょうか？

よく「効率化」や「省力化」という言葉で語られますが、それだけではありません。事務作業や

情報発信をデジタル化すれば、限られた人員であっても「人と人をつなぐ」「新しい価値を生み出す」ことに、より多くの時間やエネルギーを使えるようになるのです。

私自身、スマホ教室などで「最初は不安だったけど、使えるようになったら家族や仲間とも連絡がとれて、世界が広がった」といった喜びの声や笑顔をたくさん見えました。

大切なのは、ICTが「人を遠ざけるもの」ではなく、「人と人の温かさを広げる道具」にもなり得る、ということです。その一歩を一緒に踏み出してみませんか？

第4章

社会教育の

有機的ネットワークの伝統と

現代的課題

日本の社会教育は、もともと地域のいろいろな人たちが知恵や力を持ち寄り、学び合い、助け合いながら進めてきた歴史があります。

第2章

社会教育現場の今と課題意識

デジタル技術を社会に生かす

自治会や公民館、NPO、ボランティア団体などが、教える人・教わる人といった枠を超えて、共創・協働のネットワークを築いてきました。

でも今は、人口減少や高齢化、活動の担い手不足、デジタル格差など、新しい課題も増えています。これまでのネットワークだけでは難しいことも、きっとあるはずです。

だからこそ、ICTという新しい力を活かして、より柔軟で持続可能なネットワークへと進化させる時が来ているのだと思います。

第5章

社会教育・NPO現場での

ICT導入事例

——京セラの取り組みから

実際に、ICTを導入した現場ではどんな変化が起きているのでしょうか？

たとえば、私たちが関わった自治体では、防災訓練や地域イベン

トの情報共有に京セラのスマートフォンやタブレットを使っています。現場と本部がリアルタイムでやり取りできるようになり、「もの時」だけでなく、日ごろの地域活動もぐっと効率的になりました。

また、福祉施設ではタブレットを使って利用者の健康管理や活動記録をデジタル化したことで、スタッフの事務作業が減り、一人ひとりにもっと寄り添ったサービスができるようになったそうです。

教育現場でも、タブレットでオンライン学習や保護者への情報発信を行うことで、学校と家庭、地域がしっかりとつながれるように



防災訓練

健康管理や活動記録をデジタル化

なったという声が届いています。どの現場にも共通しているのは、「困りごとや課題と一緒に考え、一緒に解決していく」姿勢です。

ICTは、現場に寄り添いながら小さな成功体験を積み重ねていくことで、大きな変化につながるのだと実感しています。





電磁的記録式投票機を用いた投票

第6章

タブレットを用いた 電子投票システム

(以下デジ選)の意義

——現場に寄り添う「選択支援」
と京セラの実績

「ICTを導入したいけれど、何から始めたらいいかわからない」「自分たちに合ったツールはどれだろう?」——そんな不安、よく耳にします。

そんなとき、総務省が進める電磁的記録式投票機を用いた投票のような取り組みは、現場ごと

に入や運用まで寄り添って支援する「選択支援型」の仕組みとして、とても心強い存在です。

京セラでも、実際にタブレット端末の導入やシステム構築に携わり、選挙現場の職員さんと一緒に運用面の工夫やサポート体制を作ってきました。

ICTは難しいものじゃない」「現場の声を聞きながら、無理のない形で進められる」——そんな実感が少しずつ広がっています。

この「伴走型」のアプローチは、社会教育現場でも大切にしたい視点だと思っています。

第7章

デジ選がもたらした 実際の効果と課題

デジ選を導入した現場からは、いろいろな変化の声が届いています。

【良かった点】

- ・タブレットで開票作業が自動化され、人手や時間の負担が大幅に削減された。
- ・投票用紙や人件費のコスト削減
- ・集計や結果発表が早くなり、開票のスピードアップ
- ・記入ミスによる無効票が減った
- ・スタンドアローン方式で、外部からの不正アクセスの心配も少ない
- ・高齢の方から「タブレット投票は分かりやすかった」という声も

【改善点】

- ・継続した導入費用削減
 - ・職員さんへの操作説明やトラブル時のサポート面の効率化
- 現場にしっかりと寄り添いなが

ら、こうした課題も一つずつ丁寧に解決していくことが、これからのICT導入には欠かせないのだと感じています。

第8章

デジ選から広がる 社会教育現場への応用

デジ選の仕組みや現場で得たノウハウは、社会教育やNPOの活動にもきつと役立つものです。

たとえば、会員管理やイベント受付、活動報告、資金管理なども、一つひとつ現場にあったICTツールを選んで、少しずつ導入していくことで負担が減り、本来の活動にもっと集中できるようになります。

「分かりやすさ」や「安心感」を何よりも大切にすることは、ICTが苦手な方にとっても心強いポイントです。

「まずは一步、やってみよう」を一緒に考え、小さな成功体験を積み重ねていく——それが社会教育の新しいネットワーク作りや、

持続的な発展につながるのだと信じています。

第9章

WEB3.0・DAO的な 学びのかたちを 社会教育現場へ

もともと社会教育は、さまざま

な人や団体が有機的につながり、
学び合い・支え合うことを大切に
してきました。

これからは、WEB3.0やDAO（分散型自律組織）のように、
デジタル技術を活かして、もっと
自由で自律的なつながりやネット
ワークを創っていきける時代です。

ICTは、そのための「つなが

りの土台」となり、誰もが主役にな
れる社会教育の実現を力強く後
押ししてくれる存在だと思いま
す。

「一人では難しいことも、つな
がればできる」。そんな新しい社
会教育のかたちを、みなさんと一
緒に創っていききたいです。

第10章

寄り添い、ともに進む

——ICT導入へのエールと 未来へのメッセージ

ICTを使うことに不安や戸惑
いがあるのは、当たり前なことデ
ス。でも、「やってみたい」「もっ
と人とつながりたい」という気持
ちがあれば、最初の一步は小さく
て大丈夫。

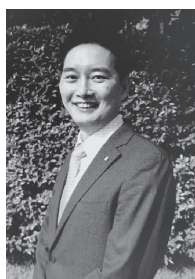
困ったときは誰かと助け合い、
わからない時は一緒に考える——
そんな寄り添いの積み重ねが、や
がて地域や社会全体の大きな変化
につながります。

デジタル技術は、誰かを置き去
りにするためのものではなく、「み
んなでもっと社会を良くする道
具」です。

これからも一緒に、ICTがも
たらす新しい社会教育の未来を描
いていけたら嬉しいです。みなさ
んの最初の一步を、心から応援し
ています。



DAO（分散型自律組織）イメージ図



横田 希
(よた のぞみ)

京セラ株式会社 通信
ビジネスソリューション研究開発部 事業開
発推進部責任者。携帯
端末の商品企画やIoT
事業開発を担当し、シ
ニア向けスマートフォンでは商品企画から端
末開発まで携わり、高
齢者がICTを通じて学
びや社会参加を広げる
取り組みに貢献してき
た。現在は通信技術を
基盤に、多様なパート
ナーと協働し、地域や
世代を超えて人と人を
つなぐ新たな事業創出
に挑んでいる。